

近代テキストに見られる日本の菓子文化に 関する小考 (1)

立川 和美

1. はじめに

現代でこそ菓子は多様化し、他の食品と並んで「間食」という食事の一端を担う存在となった。しかし、もともと食生活において菓子とは、栄養の摂取や健康の維持といった人間の生存に関わる実用的な目的を持つものではなく、いわゆる嗜好品であったのである。よって、見た目の美しさや、味・香りの良さなどの様々な価値基準を満たす食品という極めて特異な位置を占めるものとして、人々の食生活をより豊かにするという役割が重要視された。その意味では、食生活向上の水準を示す指標だともいえるだろう。更に菓子文化は、生活の中に楽しみや喜びを見出す精神的な側面からも食文化を支えており、社会における他の文化への影響力を持っている。実際、菓子文化は時代や地域と深く結びつき、極めて多様な様相を見せている。

本稿では日本の近代社会における菓子文化の実態を、明治期の文学テキストに見える菓子を手がかりに探っていく。明治の幕開けと共に西洋文化が流入することで、日本文化はあらゆる面で急激な変容を遂げたが、今回は菓子文化という視点からそれを観察したい。明治の作家たちが、その作品の中でどういった菓子をどのように用いているのかを調査し、考察していこうと思う。

2. 日本における菓子文化の流れ

日本の菓子文化は、果実や木の実が中心であった弥生・大和時代が終わり、奈良時代に入って中国大陸（唐）から穀類を中心とした揚げ（加工）菓子が伝来することに始まる。平安末期にはこの「唐菓子（からくだもの）」が変形して、草餅や粽、おこしごめといった行事食としての菓子が作られ、鎌倉時代には、禅宗の勤行の際に摂られる「点心」が伝来した。室町時代の南蛮貿易によって16世紀末に砂糖が大量輸入され、羊羹や

まんじゅうといった「和菓子」、すあまやきんつば、煎餅や飴玉といった「駄菓子」、カステラやポーロ、こんぺいとうなどの「南蛮菓子」など多くの菓子が出回るようになった。江戸時代には、これらを洗練させた「献上菓子」や「社寺用菓子」、「茶道菓子」などが登場し、これら上流社会に向けて作成された菓子は今日の和菓子の基礎となっている。江後・吉川(1997)によると、庶民の生活に菓子が取り入れられるようになったのは、人々が社会生活や経済力の安定を手に入れ、生活にゆとりが見られるようになった江戸末期からだと言われている。

さて、明治の開国で欧米文化が一気に流入し、食生活においても牛肉食や牛乳、西洋料理が摂られるようになった。菓子においては、バターやクリームなどの乳製品、チョコレートなどを用いたパンや洋菓子が出回った。また、砂糖が一般にも普及したことで折衷菓子も多く考案されたが、1874(明治7)年に東京銀座の木村屋があんパンを発売し、現在に至っているのはその一例である。

洋菓子については、1875(明治8)年に東京麹町の「村上開進堂」が開業し、1877(明治10)年にはシュークリームを試作した。東京日本橋の「風月堂」は1875(明治8)年に、新発明のボンボンや西洋菓子各種と共にチョコレートを売り出したが、1879(明治12)年にはビスケットの製造機械を導入した。

やや時代が下り、1889(明治22)年、東京赤坂の森永西洋菓子製造所がキャンデーを試作し、大正時代に入るとキャラメルが大流行した。これが「おやつ菓子」の始まりである。更に昭和に入ると菓子の機械製造が一般化し、ポテトチップスなどの「スナック菓子」の文化が広がったのである。

3. 明治期の文学について

本章では、明治期の日本文学の流れについて、その様相を概観しておきたい。

まず明治初年頃を中心に流行したのは、仮名垣魯文らによる戯作者の文学である。これは洒脱な気風と娯楽的な傾向を強く持つもので、そこには社会のあらゆる階層の人々が生き生きと描写された。1877(明治10)年頃には、新聞や雑誌が急増し、知識人の手による政治小説が盛んに書かれると共に、西洋に対する強い関心から多くの翻訳小説も出版された。

本格的な近代小説は、1885(明治18)年に坪内逍遙が『一読三歎当世書生氣質』、『小説神髓』を発表したことに始まる。逍遙は「小説の主脳は人情なり。世態風俗これに次ぐ」として小説を芸術と考え、特にその写実性を重視した。また逍遙と並んでこの新文学運動を押し進めたのが二葉亭四迷である。『あひびき』『めぐりあひ』の翻訳などロシア文学に影響を受けた彼は、1886(明治19)年『浮雲』を発表し、当時の人々の内面の葛藤を描いた。また1885(明治18)年には尾崎紅葉、山田美妙、石橋思案ら硯友社の同

人によって『我楽多文庫』が発刊された。この尾崎紅葉と同時代に活躍した幸田露伴は、1889(明治22)年に『風流伝』で名声を得、理想主義・芸術至上主義的な作品を多数発表した。そしてこれらの作家たちによって言文一致体が完成され、形式・内容共に本格的な近代小説が盛んに書かれるようになるのである。

1887(明治20)年に入ると、森鷗外がやや保守的な傾向を持つ雑誌『しがらみ草紙』を、1893(明治26)年には北村透谷、島崎藤村らが革新的主張を持った雑誌『文学界』を出版し、これまでに増して進んだ文学の理念と作品が強く求められるようになった。

また1880年ごろ(明治20年代から30年代にかけて)起こった日清戦争や日露戦争は社会や文化に大きく影響を与え、泉鏡花らによる観念小説、小杉天外らによるゾライズム(自然主義)、徳富蘆花らによる社会小説などを生み出した。これらはいずれも、写実では捉えきれない人間の内面や社会の真相を表現しようとしたものである。

例えば、小杉天外は『はやり唄』(明治35年)の序で「自然は自然であり、「善」でも「悪」でも「美」でも「醜」でもない」と唱えているが、これは様々な道德・社会といった枠組みを取り払った視点で人間の真実を描こうといった姿勢の表れと見てよいだろう。小説の芸術性を否定し、自己主張と自己否定という二重性をもって専ら事実を描く自然主義は、極めて革新的な文学運動であり、そこでの国木田独步、田山花袋、徳田秋声らの活躍は有名である。

1905(明治38)年には、東大英語講師でロンドン留学の経験を持つ夏目漱石が『ほととぎす』に『吾輩は猫である』を発表した。彼は急速に西洋化していく社会の中で精神的なジレンマを抱える近代知識人の生き方の問題をとりあげ、多くの作品を残した。また明治期の日本文化に関しても「文化の外発性」など深い洞察を持った指摘を行っている。

4. 近代文学テキストに出現する菓子の実態

本章では、近代文学テキストにおける菓子について、具体的にその出現の様相をまとめておきたい。本稿では稲垣編(1989)⁽¹⁾に見られる菓子について、宮内(1982)に示された菓子⁽²⁾、加えてそこに示されていない「アイスクリーム」、「羊羹」を調査した。ここでは実際に出現した菓子についてのみ、その度数を示す。⁽³⁾

<表1:『明治文学全集』所収の作品に見られる菓子(数値は用例実数)>

*和菓子16項目(全30例)

・かしわ餅	1	・草餅	1
・桜餅	1	・大福餅	1
・ういろう	1	・ちまき	1
・今川焼	2	・きんつば	2
・カステラ	7	・もなか	1
・塩煎餅	1	・かりんとう	1
・麦落雁	1	・しおがま	2
・こんぺいとう	6	・羊羹	1

*洋菓子6項目(全34例)

・あんパン	2	・ケーキ	2
・シュークリーム	1	・チョコレート	11
・ビスケット	10	・アイスクリーム	8

上記の表から明らかな通り、取りあげられている種類は和菓子の方が圧倒的に多いものの、出現度数は洋菓子の方が多い。ここから、この時代に和菓子はかなりのバリエーションを持って広まっていた事実、そして一部分の西洋菓子が少なくともその名称については人々の間に浸透していた実態を見て取ることができる。以下、和菓子・洋菓子の各々について特徴的な点を挙げておきたい。

まず和菓子については、生菓子が8種類10例あり、餅や蒸し物が中心で、「柏餅」「桜餅」「草餅」「ちまき」など自然の植物といった素材を生かした季節ごとの菓子が目を引く。実際の作品として、次の例では日付を付した上で用いられている。⁽⁴⁾

五月五日

下戸家(げこか)にて柏餅を手製にす、大小極(きま)りなし、餅は葉にへバリ付て甚だ不手際なものなり、その古昔(いにしえ)を尋ぬるに徳川將軍の時世根岸邊の地主何某(なにがし)が茶事に此菓子を肴とぞ、委しくは落語筆記にあり、(明治29年『幸堂滑稽談—来年の愚調法東京年中行事』幸堂得知著)

次の引用は徳田秋声の『娶』という小説で、明治42年の初夏に秋声夫妻が子供らと一緒に夫人の故郷である長野県を訪ねた時のことを題材にしている。一家が田舎の人々とお茶を飲む場面である。

水の黄色く濁つた川縁の、埃つばい小逕を歩いて来ると、穢(きたな)い人家が二三軒目についた。垣根には草が這ひかかって、白い埃を浴びてゐた。(中略)歩いてゐるうちに子供は其方(そつち)へ駈登り、此方(こつち)へ走降りなどして、菜花や色の薄い堇(すみれ)を夢中になつて摘んでゐた。(中略)

川縁(かはべり)の葦原へ出て見ると、下(しも)の方に、子供は何やら取巻いて見てゐた。丁度洗場のあるところで、大きな橘の樹が鬱鬱(こんもり)した其(そ)の枝葉を繁(しげ)らせてゐた。其の蒼々(あをあを)した木の下蔭(したかげ)に、女は青味がかつた縞の綿ネルの腰巻を剥出(むきだし)に、跪坐(くわいざ)んで、俎板(そだて)のうへで、バタバタ草を叩(たた)いてゐた。(中略)

この草餅が出来る頃まで、自分等は、叢で、子供を相手に戯れてゐた。切株の上へ乗つて、飛(と)び競(くら)をした。幹のザラザラする胡桃の木へも登つた。

(明治42年『娶』徳田秋声著)

ここで「草餅」は、「菜花」や「堇」の咲く田舎で手作りされる菓子であり、作品の描写に生彩を加えるモチーフとして登場している。これは、この菓子が既に社会に充分広まり認知されているという前提があり、読者もそこから大きくイメージを膨らませることが可能であるために用いられているのだといえよう。この他に用例の多いものとしては、「カステラ(7例)」と「こんぺいとう(6例)」がある。これらは室町時代に輸入された南蛮菓子だが、既に明治時代には一般に普及していた菓子と考えられる。但し、同じ南蛮菓子でも「ポーロ」は全く用例がなく、宮内(1982)の表においても「洋菓子」に入れられていることから、これら南蛮菓子の定着については種類によって差が見られることが分かる。

洋菓子では、特に「ビスケット(10例)」、「チョコレート(11例)」、「アイスクリーム(8例)」の用例が突出している。これらについては、まずその表記法に特徴が見られる。

<表2: 西洋菓子の表記法(数値は用例実数)>

*アイスクリーム

アイスクリーム 3 アイス, クリーム 1 アイスクリイム 1

アイスクリム 1 氷菓 1 氷菓子 1

*チョコレート

チョコレート 5 査古聿(チョコレート) 1 査古聿(しよこらあ) 1

査古聿(ちよこれえと) 1 査古聿(ちよこれーと) 1 査古聿(ルビ無) 1

*ビスケット

ビスケット 7 乾蒸餅(ビスケット) 1

アイスクリームについては、「氷菓」「氷菓子」にはそれぞれ「アイスクリーム」とルビがふってあり、ここから菓子の呼び名としては定着していたが、表記はまちまちであったことが分かる。同様の事実はチョコレートにも見られる。ところがビスケットについては、漢字表記は基本的に用いられていない。これは、もともと日本語の発音としてハ行の濁音が冒頭に位置する習慣がないこと、また固い焼き菓子として江戸時代までに存在していた煎餅に比べて、ビスケットは味も食感も全く異質であり、西洋から来た新しい菓子という認識が強かったことが関係すると予想される。この他ケーキも「ケイキ」「ケーキ」の2例のみだが、やはりカタカナ表記となっており、南蛮渡来の「カステラ」とは似て非なる新しい菓子と認識され、特別なイメージを持たれていた菓子だといえる。この意識は現代社会にも受け継がれている。

また、「シュークリーム」といった従来の日本の菓子文化からはおよそ考えつくことのない洋菓子については、徳富蘆花の書いた『雲のゆくへ』という作品の中で登場する。

「おほほ、貴下今晚は何(どう)かして入(いらつ)しやるのね。」

「眞箇何かしてゐるかも解らんのですよ。私は見かけによらぬ暢気(のんき)でないのですからな。」と真面目腐った顔を傾(かし)げた。(中略)

「楢村さん、貴下彼方(あちら)はお可厭(いや)?。お所好(すき)なシユウクリームがどつさり取つてございますの。」

「それは有難い。然し奥さん、着かんことを伺ふやうですが、比企君の面前で私と貴女と何か睦(むつ)まじい真似をしたら、比企君は慍(い)るでせうな。」と愧(とほ)けた目色をする。

(明治33年『雲のゆくへ 七十八』徳富蘆花著)

これは華族である比企寛の夫人牧子が、楢村という男を自分の部屋へと引き込んでい

る部分であり、不道德な行為と特権階級(華族)のみが口にすることができる高価な洋菓子とのとりあわせが絶妙である。ここでシュークリームは、比企家の財力や当時の特権階級に広がっていた洋風好み、庶民とは隔絶した生活レベルや意識などを象徴し、更に簡単には手に入らない甘美な菓子として美しい人妻牧子が提供するにふさわしいモチーフとなっている。

以上のように、明治文学においては、和菓子は日本人が古来からその微妙な変化を愛でてきた季節感を強調にしたり、読者のイメージを膨らませてテキスト内容を豊かにしたりするものとして用いられていた。個々の菓子は、かなり具体的で、かつ筆者が期待したような印象を読者に与えうるモチーフであったといえる。一方、南蛮菓子や洋菓子は、当時社会に出回った少数の種類が作品に登場するものの、読者層には必ずしも洋菓子文化が構築されておらず、一定の効果を持たせるに留まっている。明治期の人々の生

活においては、まだまだ和菓子の定着がやっとであり、洋菓子はそのごく一部の特定の菓子のみが注目されていたのである。

5. 諸作家の作品に見られる菓子の特徴

本章では、菓子が文学テキストの中に実際に出現する形、また作品に与える効果を、作家や作品の特性と関係づけて具体的に記述し、当時の食生活や菓子文化を考えていきたい。今回は明治期の幕あけである1867年（慶応3年）に生まれた以下の4人の作家をとりあげる。各作家の生没年と主たる文学の傾向は以下の通りである。

・ 斎藤緑雨（1867-1904）

伊勢（三重県）生まれ。仮名垣魯文に学び、戯作調の短文を多く発表した。

・ 幸田露伴（1867-1947）

江戸の下谷生まれ。理想主義的傾向を持つ擬古典主義派で、尾崎紅葉と共に「紅露時代」を築いた。

・ 夏目漱石（1867-1916）

江戸牛込の生まれ。明治の文壇において森鷗外とともに圧倒的な位置を占めている。東大英文科講師を勤めた後、朝日新聞社に入社し連載小説を多数執筆した。

・ 正岡子規（1867-1902）

松山の生まれ。俳句や文章における「写生」を主張し、雑誌『ほととぎす』を創刊した。

以下、各々の作家のテキストに見える菓子を順に見ていくことにする。

① 斎藤緑雨

伊勢神戸（三重県鈴鹿市）に生まれ、10歳の時に父と共に上京し、本所に住んで下町の雰囲気の中で育った。12歳で句作を覚え、18歳の時に仮名垣魯文の門下に入る。戯作風のパロディに富んだ作風を持ち、正直正太夫の筆名で風刺的な小説を書いた。雑誌『めさまし草』に、鷗外・露伴と作品合評「三人冗語」を連載し、樋口一葉に高い評価を与えた人物である。

緑雨の作品に見られる菓子は、「アイスクリーム」と「チョコレート」という2種類の西洋菓子である。

・ やりくりにて兎（と）も角（かく）も送（おく）れる人（ひと）の妻（つま）の、アイスクリームといふは、ただ高利貸（かうりかし）の異名（いみやう）とのみおぼ

え居(を)りぬ。知合(しりあひ)のもとに行(ゆ)きたる折(をり), 夏(なつ)は馳走(ちさう)もなし, アイスクリームなりともと言(い)はれたるにハタと憤(いきどほ)りて, あなた, 嘲弄(てうろう)なすつてはいけません。

(明治30年『おぼえ帳(八)』斎藤緑雨著)

・年久(としひさ)しく痰咳(たんせき)になやめる老人(らうじん)の, チョコレートを召上(めしあが)らずやと言(い)はれて, いやもう薬(くすり)は洋法(やうほう)でも利(き)きませぬ, この頃(ごろ)は浅田(あさだ)の飴(あめ)にきめました。

(明治31年『ひかへ帳(八)』斎藤緑雨著)

これらは共に雑誌『太陽』に連載された作品で, 緑雨独特の体裁を持つ「短文批評」である。批評の対象は風俗から文明まで幅広い領域にわたり, 平易・簡潔な「小咄」の形式をとるアフォリズムは, 読み手をひきつけ高い評価を得た。ここで用いられている菓子は, 「氷菓子(=アイスクリーム)」と「高利貸」が同音異義語である点, 洋菓子の「チョコレート」を老人が薬の名前と間違える点を嘲笑するもので, 緑雨は西洋文化に追いつけない一般庶民の様子を揶揄している。アイスクリームとチョコレートという江戸時代までは全く馴染みのない菓子を用いることによって, このおかしみは作り出されているのであり, これは次の例などに同様の視点を見て取れる。

・ダイヤモンドとダイナマイトの誤(あやまり)は雪中梅(せつちうばい)に用(もち)ひられ, ワイフとパイプの誤(あやま)は, 落語家(はなしか)に傳(つた)へらる。コスメチックといふべきを何某(なにがし)の作家(さくか)の事(こと)もなげに, ルーデサック。

(明治31年『ひかえ帳(八)』斎藤緑雨著)

以上のように緑雨は, 明治の時代批評という独自の文学領域において, 西洋文化の摂取にひたすら邁進ながらもそれを成し得ていない日本の実態を鋭く指摘している。また, この軽妙な短文批評の中には, 緑雨の日本文化に対する危惧も感じられるが, 菓子文化という身近な話題を用いて読者に親しみやすさを持つことで, そういった思想を暗に伝えようとする意図もあったのかもしれない。

②幸田露伴

江戸下谷で生まれ, 芝汐留の電信修技学校を卒業し, 北海道余市で電信技師として勤めた後, 戯作調の小説を書き始めた。露伴の作品に見える菓子として, まず『風流仏』

の中の「ケーキ」の例を見てみたい。以下、やや長い部分だが、引用する。

世の中に病(やまひ)てふ者なかりせば男心(をとごころ)のやさしかるまじ。髭先(ひげさき)のはねあがりたる當世才子、高慢の鼻をつまみ眼鏡(めがね)ゆゆしく、父母干渉(かんせふ)の弊害(へいがい)を説(とき)まくりて御異見の口に封鎖(ふうらふ)付玉(つけたま)ひしを、一日粗造(そざう)のブランデイに腸加答児(ちやうカタル)起して閉口頓首(へいこうとんしゆ)の折柄、古風の思ひ付(つき)、気に入らぬが片栗湯(かたくりゆ)こしらへた、食(たべ)て見る気はないかとの御介抱有難く、へこたれる腹にお母(ふくろ)の愛情を呑(のん)で知り、是(これ)より三十銭の安西洋料理(やすせいやうれうり)食ふ時もケーキ丈(だけ)はポケットに入れて土産(みやげ)となす様にもなる者ぞ、ゆめゆめ美妙(びめう)なる天の配剤(はいざい)に不足云ふべからず、と或人仰せられしは尤(もつとも)なりけり。珠運馬籠に寒(かん)あたりして熱(ねつ)となり、旅路の心細(ほそ)く二日計(ふつかばか)り苦(くるし)む所へ、吉兵衛とお辰尋ね来り様々の骨折り、病のよき汐(しほ)を見計(みはか)らひて駕籠(かご)安泰に亀屋へ引取り、夜の間(ま)も寝ずに美人の看病、(中略)お辰は我が身の為にあらゆる神々に色々の禁物(たちもの)までして、平癒せしめ玉へと禱りし事まで知りて涙湧(わ)くほど嬉しく、一ト月あまりに衰(おとろへ)こそしたれ床(とこ)を離れ其祝儀済みし後(のち)、珠運思ひ切つてお辰の手を取り一間(ひとま)の中(うち)に入り、何事をか長らく語らひけん、出(いづ)る時女の耳の根紅(あか)かりし。

(明治22年『風流仏』幸田露伴著)

これは1889(明治22)年の作品だが、主人公の若き芸術家「珠運」が旅上の木曾馬籠で発熱し、お辰という花漬売に看病してもらうことで、二人の間に深い恋愛感情が生じる場面である。二人はこの後、仲を裂かれてしまうが、珠運が全身全霊でお辰を神化した仏像を彫刻し、出来上がった美神の力によってお辰が彼のもとに戻ってくる。古いタイプの日本人である主人公(珠運)を描く上で、露伴は西洋文化にかぶれた男子のたとえを引いているのである。

露伴は紅葉と共に戯作文学から出発した作家で、両者はしばしば並んで取りあげられるが、紅葉が「我楽多文庫」を興して戯作調の文学を書き続けた一方で、露伴はそれとは離れた立場に立ち、西洋文化の急速な流入のまっただ中に暮らす実際の人々をふまえて作品を書いた。その態度は、明治の時代において古くからの日本文化を見つめ直しながら新しい日本文化を創造すべきだといった彼の思想に基づくものであったといえる。その結果、新と旧が共存するという形がしばしば彼の作品には見られ、ここでも古いタイプの青年男女をモチーフとする作品でありながら、こういった「ケーキ」という洋菓

子を用いた描写が取り込まれているのではないかと考えられる。

さて、次はやや時代が下った明治36年『天うつ浪』（1903年9月より読売新聞に連載1904年日露戦争のために中絶）の一節である。

「左様（さう）かい、其奴（そいつ）あ頼もしかつた！。奢つて遣らう。」

「オヤ、其（それ）あ早速（さつそく）にまあ有り難う！。さうして何を奢つて下さる？」

「生憎（あいにく）劇場（しばゐ）は好（い）いところが開（あ）いて居ねえナ。」

「さうネエ。」

「秋草（あきくさ）も今日（けふ）の此の風ぢやあもう。」

「さうネエ。」

「矢張（やつぱ）り下卑（げび）ても甘い物といふところで堪忍（かに）して貰はう。」

「さうねエ。それぢやあ、あの、何を？」

「今川焼（いまがはやき）の皮の厚い冷（つめた）いのも。ハハハハハ。」

「エエ悔しいよ、おぼえて居らつしやい。もう貴君（あなた）の云ふ事は當（あて）に仕やしない。」

（明治36年『天うつ浪 其二十九』幸田露伴著）

この作品は当時の現代社会をそのままモチーフとしたもので、引用部は若い男女の軽妙な会話であり、人々が口にしていた一般的な菓子「今川焼」を女性が男性から奢って貰う「甘い物」として登場させている。これは先の例とは対照的な、いわゆる当時の現代社会に生きる実際の人々を活写する部分であるが、その実態に即した食生活を自然に描くことによって、会話にリズムを与え、内容に現実味を増す効果を生んでいる。

③夏目漱石

江戸牛込町の生まれでもともと建築家を志していたが、22才の頃に文学者になることを決意し、東京帝国大学文科大学英文科を卒業した。正岡子規とは学生時代からの友人で、29才の時には子規の故郷松山で高校の英語教員を勤め、随想や漢詩等を『ほととぎす』より発表した。明治36（1903）年に3年間の英国ロンドン留学から帰国後、東京帝国大学で英文学の教鞭をとる傍ら、明治38（1905）年『吾輩は猫である』を、翌年『坊っちゃん』を『ほととぎす』に発表した。明治40（1907）年には朝日新聞社に入社し、文学者として本格的に活動を始め、大正5年（1916）12月に新聞連載小説『明暗』を中絶したまま死去した。

以下、漱石作品における菓子について見ていきたい。まず『坊っちゃん』では次のよ

うな例が見られる。

母が死んでから清は愈おれを可愛がった。時々はお供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思つた。(中略) 夫でも清は可愛がる。折々は自分の小遣で金鰐や紅梅焼を買つてくれる。寒い夜などはひそかに蕎麦粉を仕入れて置いていつの間にか寝て居る枕元へ蕎麦湯を持つて来てくれる。時には鍋焼饅頭さへ買つてくれた。

(明治39年『坊っちゃん』夏目漱石著)

これは下女の清が主人公の坊ちゃん(おれ)に様々な「食ひ物」を買ってくれることを述べている部分だが、「きんつば」といった江戸から庶民に親しまれた駄菓子が登場している。『坊っちゃん』の登場人物はいずれも単純で典型的であるが、主人公の乳母である清は素朴な人柄の女性であり、「きんつば」はそれを表すに極めてふさわしい菓子だといえよう。

『それから』は明治42(1909)年6月27日から10月14日に朝日新聞に連載された作品だが、アイスクリーム、チョコレート、粽の3種類の菓子が出てくる。まずアイスクリームとチョコレートは次のようである。

誠太郎と云ふ子は近頃ベースボールに熱中してゐる。代助が行つて時々球を投げてやる事がある。彼は妙な希望を持つた子供である。毎年(まいとし)夏の始めに、多くの焼芋屋が俄然(がぜん)として氷水屋(こほりみづや)に変化するとき、第一番に馳けつけて、汗も出ないのに、氷菓(アイスクリーム)を食ふものは誠太郎である。氷菓(アイスクリーム)がないときには、氷水で我慢する。さうして得意になつて帰つて来る。

(明治42年『それから 三の一』夏目漱石著)

「もう学校は引けたのかい。早過ぎるぢやないか」

「ちつとも早かない」と云つて、笑ひながら、代助の顔を見てゐる。代助は手を敲(たた)いて婆さんと呼んで、

「誠太郎、チョコレートを飲むかい」と聞いた。

「飲む」

代助はチョコレートを二杯命じて置いて誠太郎に調戯(からかひ)だした。(中略)

「だつて御父さんは左様(さう)云つてなすつた」

「何て」

「明日(あした)学校の帰りに代助の所へ廻つて何かご馳走して貰へつて」(中略)

「それで、わざわざ遣つて来たのかい」

「ええ」

「兄（あにき）の子丈（だけ）あつてなかなか抜けないな。だから今チョコレートを飲まして遣るから好（い）いちやないか」

「チョコレートなんぞ」

「飲まないかい」

「飲む事は飲むけれども」

（明治42年『それから 六の三』夏目漱石著）

『それから』の主人公長井代助は、仕事をすることもなく、資産家の父親から月々貰う金で暮らしている高等遊民である。彼は、自分の身体の美しさを大切にし、かつそれを誇りに思い、また朝食にはパンと紅茶を食すといった人物である。ここで二種類の菓子は、いずれも代助の実兄の息子「誠太郎」という男の子が登場する場面に用いられている。この実兄には娘「縫」もおり、彼女はヴァイオリンを稽古し、日に何遍となくリボンに掛け替え、「好くってよ、知らないわ」を口癖にしている。妻の「梅子」（代助の嫂）は、「わざわざ仏蘭西にいる義妹に注文して六づかしい名のつく、頗る高価な織物を取寄せて、それを四、五人で裁って、帯に仕立てて着てみたり」する人物である。これらのことから、誠太郎はかなり裕福な家の子供であることが分かる。

こういった状況に置かれた子供のお菓子として「アイスクリーム」があり、「チョコレート」があるのである。ここで誠太郎が食べるのは、どうしても「かりんとう」や「今川焼」ではなく、洋菓子でなくてはならない。洋菓子はこういった特権階級の子供たちには（のみ）自然と口にされ、そういった文化はかなり浸透していたことが分かる。

一方「粽」は、同じ『それから』の中の次の場面に登場する。

「お父さんは居ますか」

嫂（あによめ）は返事をする前に、一應代助の様子を、試験官の眼で見た。

「代さん、少し瘦（や）せた様ぢやありませんか」と云つた。代助は又頬を撫でて、「そんな事も無いだらう」と打ち消した。

「だつて、色澤（いろつや）が悪いのよ」と梅子は眼を寄せて代助の顔を覗（のぞ）き込んだ。

「庭の所為（せゐ）だ。青葉が映るんだ」と庭の植込の方を見たが、「だから、貴方だつて、矢つ張り蒼いですよ」と続けた。（中略）

梅子は（中略）手を鳴らして小間使いを呼んだ。（中略）下女が好（い）い香（にはほひ）のする葛（くず）の粽（ちまき）を、深い皿に入れて持つて来た。代助は粽の尾をぶら下げて、頬（しき）りに嗅（か）いで見た。（中略）代助は粽の一つを振り（ふりこ）の様に振りながら、今度は、

「兄さんは、何(ど)うしました」と聞いた。梅子はすぐ此陳腐な質問に答へる義務がないのかの如く、しばらく縁鼻(えんばな)に立つて、庭を眺めてゐたが、「二三日の雨で、苔(こけ)の色が悉皆(すつかり)出た事」と平生に似合はぬ観察をして、故の席に返つた。

(明治42年『それから 十四の二』夏目漱石著)

これは梅雨に入って二三日続いたすさまじい雨の後、代助が実家を訪ねる場面である。庭の青葉、苔の緑、そして菓子の粽がうまく配置され、みずみずしい香りを場面一面に映し出している。視覚と嗅覚との双方に訴える見事な描写である。またこの嫂の梅子は、「天保調と明治の現代調を容赦なく継ぎ合わせた様な一種の人物」であるが、そういった人物が小間使いを呼んで持って来させる菓子としては、このように季節感を意識した、「場」にあった粋なものではなくてはおかしいわけである。

このように漱石の小説においては、その文脈に沿った菓子が慎重に選ばれ、登場人物の性格や場面設定に多大な影響を及ぼしていることが明らかである。またその使用状況から、明治期の菓子文化が人々の立場によって多様な形で存在し、特に西洋菓子についてはかなり偏って受容される傾向があったことが伺われる。

さてこの他、漱石の『倫敦消息』では、「ビスケット」が登場する。

向ふの方に若い女と四十恰好の女が差し向いに座を占めて居た。我が輩の右に一間許り隔つて婆さんと娘がベチャベチャ話をして居る。向ふの連中は雑誌を読みながら「ビスケット」かなにかかちつて居る。

(明治34年『倫敦消息 一』夏目漱石著)

この作品は、日本で病床にある友人正岡子規に3回に渡って送られた書簡で、明治34年4月に書かれた。漱石のロンドンでの生活を随筆風に綴ったものである。外来語はカタカナの「 」付きで表記されており、食品については「オートミール」「ベーコン」、焼パン(これには「 」は付されていない)、(雪駄のカカトの様な)「ビステキ(ママ)」などが登場し、ロンドンの食生活や食文化がよく描かれている。こうしたロンドンでの生活は後の作品に登場する様々なモチーフにも影響を及ぼしたことはいうまでもなく、漱石作品における菓子の果たす印象的な力とも大きく関係しているといえよう。

④正岡子規

伊予温泉郡藤原町(今の松山市)に生まれる。14才頃から漢詩を作り始め、1889(明治22)年、23才の頃から漱石と交遊、新聞『日本』に俳句を発表したり、句会を開催したりした。彼は「写生」というありのままを自然に写し取る詠み方を唱えた。1895(明

治28)年には従軍記者となるが、中国からの帰国の船上で喀血し、翌年にはほとんど歩くこともできなくなった。しかし、文学への活躍の気力は衰えることはなく、1897(明治30)年『ほととぎす』を創刊し、その後ほぼ寝たきりの生活となるも、『墨汁一滴』などの随筆を発表した。

さて、まず子規の短歌に見られる菓子について見てみたい。次の例は、明治15年から35年までの短歌集『竹乃里歌』からである。

原千代子きのふ来りてくさぐさの話ききたりかすてら喰ひつつ

椎の葉にもりにし昔おもほえてかしのもちひ見ればなつかし

「かすてら」「かしのもちひ」といった馴染みの深い菓子は、歌全体に柔らかで自然な印象を与え、その響きも美しい。「柏餅」については、この歌に始まり、10首の連作となっており、日本古典文学及び日本文化を背景とした歌が並んでいる。

また次に示す『仰臥漫録』は明治34年9月2日からの日記で、その日の食事や天気、気持ちなどが自由に書かれている。この頃の生活については、『墨汁一滴』(明治34年1月10日～7月2日)と『病床六尺』(明治35年5月5日～9月17日)が、新聞『日本』に発表されているが、『仰臥漫録』は生前に公にされることはなかった。それだけ、彼のプライベートな部分がよく現れた作品だといえる。例えば、明治34年10月13日には、「自殺の熱ハムラムラト」起こったとし、小刀と錐の柄が書かれている。更に麻酔剤の服用、「始終ドコトナク苦シク、泣く」といった闘病の苦しみも記されている。

九月十五日

昨夜疲レテ善ク眠ル

牛乳 葛湯

昼飯 粥三碗 泥鰯鍋 牛乳 菓子パン 水飴 (後略)

九月十七日 晴 ヒヤヒヤスル

朝 粥三碗 佃煮 奈良漬 梅干

包帯取換及便通

牛乳七勺ココア入 アンパンーツ 菓子パン大一ツ (後略)

十月二十日 鼠骨来ル加藤叔父来ラル午後虚子来ル

朝便通、朝飯ナシ、牛乳五勺紅茶入、ビスケット

午飯三人共ニ食フ、サシミ、豆腐汁、柚味噌、ヌク飯三ワン、リンゴーツ

牛乳五勺紅茶入 ビスケット、煎餅（後略）
（明治34年『仰臥漫録』正岡子規著）

ここには、病床にあって唯一の喜びである食生活が克明に記され、菓子を楽しむ子規の姿が目浮かぶようである。これは病人の食生活であるため必ずしも一般的ではないが、菓子パン（これはクリームパンやジャムパンなどと考えられる）やあんパン、ビスケットといったものが食事の一部として取り入れられていたことが分かる。特にビスケットは当時海軍の滋養食としても用いられていたことから、病中に食する栄養価の高い菓子として認められていたのであろう。これらはあくまでも食事の中に取り入れられたパン食であり、菓子文化本来の形とはややずれている部分もあるが、いずれにしても興味深い記録である。

6. おわりに

明治初年に生まれた4人の作家のテキストを通して、当時の日本の菓子文化について考察を行った。作家ごとに菓子というモチーフの用い方には特徴が見られ、西洋菓子の流布の実態や庶民の菓子の取り入れられ方などが観察できた。以下、各作家の特徴を簡単にまとめておきたい。

斎藤緑雨は、軽妙なパロディを用いたウィットに富む独特の批評における有効な手段として、菓子を用いた。当時の世相を鋭い筆致で描く彼の作品に見られる菓子文化は、一般の人が西洋への憧れを強く持ちつつも、それに対応しきれない状況を象徴的に表している。

幸田露伴は、理想主義・芸術至上主義といった西鶴の影響をうけた古典的な傾向を持つ作品を多く書いたが、作品中に「ケーキ」を登場させる新しさも持っている。また当時の社会を題材とする現代的な内容の作品では日本の駄菓子である「今川焼」を用い、菓子文化の実態をうまく利用している。

夏目漱石は、ロンドン留学という経験と、「明治の知識人の自我」という彼の作品のテーマを限りなく生かすべく「チョコレート」や「アイスクリーム」といった菓子を効果的に用いている。特に、明治期における菓子文化は一様な浸透が見られず、かなり階級差があることがその作品から明らかとなった。

正岡子規は、写生の短歌・俳句において「かすてら」や「かしわもち」といったあたたかみのある素材を用いるとともに、自らの日記では菓子パンやビスケットといった洋菓子への親しみが表されている。闘病の中で食生活を楽しみとしていた彼は、様々な菓子に対して親しみを持っており、それが作品にも反映されているといえる。

以上、本稿では、明治期の菓子文化の一側面を観察してきた。次稿では、より具体的

な菓子をとりあげ、テキストにおける出現の様相から考察を深めたい。

注

(1) 『明治文学全集』は全100巻、各巻約500ページより成る。戯作文学や政治小説に始まり、坪内逍遙や二葉亭四迷、硯友社、鴉外、漱石、自然主義などといった小説の他、正岡子規や石川啄木の短歌、山村暮鳥や野口雨情などの詩、小泉八雲やモース、ベルツらの外国人作家の作品などを広く網羅的に所収している。

(2) 以下の菓子が掲載されている。(下位分類は省略する)

*和菓子

(生菓子) 安倍川餅、うぐいす餅、おはぎ、かしわ餅、鹿の子、ぎゅうひ、切り山椒、草餅、くず餅、桜餅、大福餅、だんご、つばき餅、ゆべし、わらび餅、ういろ、かるかん、きみしぐれ、くず桜、ちまき、くず饅頭、そば饅頭、利休饅頭、酒饅頭、薄皮饅頭、蒸しようかん、今川焼、どら焼、きんつば、唐饅頭、淡雪かん、錦玉かん、水ようかん、練りきり

(半生菓子) カステラ、くり饅頭、タルト、茶通、桃山、のし梅、練りようかん、もなか

(干菓子) 瓦煎餅、南部煎餅、巻煎餅、塩煎餅、品川巻、松風、八ツ橋、かりんとう、揚げ煎餅、揚げおかき、落雁、麦落雁、秋田諸越、おこし、ごかぼう、しおがま、いしごろも、源平豆、雛あられ、あるへいとう、カルメラ、こんべいとう、ひき鮎

(缶詰菓子) 水ようかん缶詰、ゆで小豆缶詰

*洋菓子

(生菓子) ドーナッツ、あんパン、クリームパン、ジャムパン、ショートケーキ、シュークリーム、ワッフル、エクレア、ババロア、プリン、ゼリー

(半生菓子) パウンドケーキ、バームクーヘン、アップルパイ、パルミエパイ

(干菓子) ビスケット、クッキー、ボーロ、ロシアケーキ、ウエハース、ソーダクラッカー、オイルスプレークラッカー、板チョコ、被膜チョコ、棒チョコ、フィンガーチョコ、キャラメル、ゼリービーンズ、ヌガー、チャイナマーブル、ドロップ、マシュマロ、板ガム、風船ガム、糖衣ガム、マロングラッセ、ポテトチップ、コーンチップ

(缶詰菓子) ババロア缶詰、プリン缶詰、ゼリー缶詰

*中華菓子 月餅、中華まんじゅう(あん、肉)

(3) この他、水菓子5例、蒸菓子1例、パン13例、サンドウィッチ5例の用例が見られた。これらについては今後とりあげたい。

(4) 以下、引用部分中の菓子には、下線を引く。()内はルビである。また、出典の年次は全て元号を付す。

主要参考文献一覧

麻生磯次(1960)『日本文学史の指導と実際』明治書院

石川寛子・江原絢子(2002)『近現代の食文化』弘学出版

石毛直道監修(1999)『講座食の文化第三巻 調理とたべもの』(財)味の素食の文化センター

稲垣達郎編（1989）『明治文学全集』筑摩書房

江後迪子・吉川誠次（1997）「江戸末期の菓子普及状況（第2報）一馬琴日記にみえる菓子について」芳賀登・石川寛子監修『全集日本の食文化第10巻 日常の食』雄山閣出版
p227-236

中村光夫（1954）『日本の近代小説』岩波書店

宮内 明（1982）『新編日本食品事典』医歯薬出版